

長与又郎日記 昭和十三年七月

照沼 康孝
中野 実

凡例

- 1、校訂に当たって、漢字は原意をそこなわないかぎり現在一般につかわれている簡略体を用いた。
- 2、明白な誤字、脱字は脇に「」で示した。
- 3、片仮名は原則として平仮名に統一し、変体仮名は普通体平仮名になおした。
- 4、本文中判読不能、欠けている箇所は□で示した。
- 5、濁点、句読点は適宜附した。

七月一日 金 曇

午後小野塚博士と総長室に於て約一時間経済学部問題に関して意見を交換す。余は経済学部内両方面の意向、他学部主腦者の意見等綜合し現状を報告す。小野塚氏は外間有識の此問題に対する批評(警察当局の警察権の濫用の非難、肅正派の面白からざる行動に対する意見等を紹介す。事件判定発表後の処置に就ても隔意なき意見を交換す。南氏来学、癌研の人事を語り懷徳館に案内す。

六月十三日、ロシア警備隊司令三等大将ウキシコフ国境を超へ間島州に遁れ来り我軍に収容さる。スターリンのテロリズムの犠牲となるを感知したるに由る。その前内蒙古に於ても砲兵少佐某自働車にて越境、我軍に収容せらる。此等の事件、本日正式に発表せらる。露国内情を暴露せる最大のニュースなり。一葉落ちて天下の秋を知る。

七月二日 土 雨

朝来又々降雨。滝、緒方両氏より電話あり、清野謙次氏収監されたりとの新聞記事に驚きてのことなり。

○清野収監

清野博士気違ふ。

紙上伝ふる所によれば、清野は神護寺その他より多数の国宝級の経巻を盗出したる由なり。近来貴重なる経巻の蒐集に熱中し居たるは、先般京都に赴きし際承知、その一、二は自分も見たることあり。巨万之富を擁する同氏のことなれば従来考古学、人類学材料の蒐集等と同様

私財を投じて之を為し研究に資する積ならんと信じ居たり。同氏亦多年写経に熱中し近頃の趣味は古代殷の経書写経等に移りつゝありしは確なり。此事果して真ならば同氏之為めには勿論学界の為にも遺憾此上なきことなり。考古学の授業を浜田氏に代りて担当し居たる関係もあり、病中の浜田総長の心痛も察するに余あり。清野は太秦署に留置せられ、辞表を呈出せりとのことなり。

去る水曜(29)経済学部教授会(11、臨時)内容(本位田、田辺、河合の話)

○荒木洋行に付教授10となる。人事以外採決同数となる時は議長に、
① Casting Vote を与えることを提議(舞出学部長)。

之に対し種々質問出づ。従来も慣例あり、今提出不思議。H.T.

経では人事に第一種と第二種とあり。第一種は3/5を要す。教授、助教授任免、助手採用等、第二種は学部長、評議員其他の委員、講座担当等は多数が慣例、同数となりし時は其都度相談して定める。

人名を Mention nominate した場合は議長 Casting Vote を行使せぬといふことで可決。

6:5、荒木は可決組。

② 助教授を退席せしめ突如舞出、土方弾刻案を提出、上野 Second、河合主として説明。

一、演習に於て学生を煽動、昨年十二月江知勝、矢内原事件の後。

OにするかKにするか。

[H] 思想問題と相異、確認あらば出せ、対決する。

二、本年新入学生、同様のことを為す。[H] 之は然らず、本年にな

り江知勝に行きしことなし

三、帝国新報に学部長会議の結果を漏す。Hがしたる噂。

H、自己はせず。

四、学友会学生総辞職の際、教授会の内容を学生に漏した。

H、本。教授会の内容は発表の場合学部長一人がする、他は沈黙を守る常例。

五、新聞に、学生に反戦的空氣ありと発表。

(H、反戦的といはず、好ましからぬ傾向ありと云つた。)

六、十二月河合学説を批判した論文を日本評論に出さんとした。

(H、友人等の忠告により中止したが、Kとは理論闘争をする意思は止まぬ。

舞出は以上の諸点を述べ反省を求む。K、H、T、U等の間に論議あり。

採決せんとす。之に対しH、Tは人事に関する故、面白からずと

云ひしも、結局採決、5:5となる。(荒木、後の責任を負ふ能はずと棄権)。

M、議長の Casting Vote を行使し決議成立を宣す。

河合之を止む。穩当ならずとして。

教授会はウヤムヤに終る。後にH、T、K、A残り、Aを攻め、背徳

(土方に対する)。

河合中裁し今後もC.V.を行使せしめぬと云ふて収まる。

之が教授会の経緯なるが、T、Hの言ふ所と、Kの云ふ所と多少相違の点

あるも大体一致す。

斯くの如く教授会にて正面衝突を為し、互に言ふ文のことを言ふのはよろし。之を為さず諸所に泣付き、或は評議会席上に於て土方一派の

居らぬ時に陳述するは不可なり。

（最悪の場合に於ける（不起訴）^{T.H}の考、Kの考は大に異なる。

Kは元来O、Yとは反対し来りし者なるが、此度の事は土方の態度、綱紀上、友義上^{トウギ}不可、人としては自然人にして悪めぬ男、之を放逐する考はなし。

偽造文書問題は執筆者不明、また之を問題にすることを勧める者あるも、自分は告訴は決してせぬといふ。

大内不起訴の場合、大内を含め一人も犠牲者を出さぬやうしたし。

H.Tは度々極言してゐるから何か面子を立てる方法なきか。

T、河合を追放することは宜しからず。能力の土□□遙かに上、更に紛争を継続する考はなし。土も自分等がbackせねは仕事は出来ぬ。日本評論掲載を中止せしめたのは自分也、外部の力を借りる考なし。

T.Hの計画的策戦^{マヤ}といふ。Kは然らずといふ。

○証拠提出せよといふに對し、自重派は提出せず。T.H.

○証拠は相当あるが、極端な場合になりし時に非れば出さず。K.

余がKに對し、偽造文書問題に確証あらば之は捨て、置けぬ。他のことは反省悔悟にてよろしからん。従来提携して来た人々なれば、といふに對し、文書には証なし。又土方の為にあまり可愛想だといひ、いざとならば略確証ありといひ、土方は大学に止めて可なりといふ。何だか分からず時々変わる。

○土方は何にしても自身反省し居るべし。反省せざれば一方的の処分を為すことは不公平なり。

○重大大波瀾の際に於ける覚悟。経教授会の意向は纏まらず。

○総長は一時は少なくとも認めざる可らず。

○不起訴となりたる時、一方が凱歌を挙ぐることは学内、学生、教育会、識者の動向に鑑み面白からず。結局all or nothingより外道なし。其時は評議會(内田案は不可)。

○K曰く、経の党派は1925以来のこと、山崎は先天的畸形なりといふ。先輩にも罪あり。宿弊。

七月二日 土 雨

またく雨、水難の害更に加はることなくば幸也。

大学に於て清野問題喧し。長谷部氏は心当りの行動を目撃したることありといふ。

十時より田辺教授を招致し、経済学部問題を語る。

田辺の所説には首肯し得る所多々あり。

午後四時河合栄次郎教授を招致、一時間懇談す。之にて略簡別の意見打診を終了す。結局問題は判決の如何に懸る。その方向如何により、経済学部は復活するか、或は崩壊するかの二途あるのみ。中間的の解決は殆んど見込なし。何れせよ解決策の実行は慎重にゆるくやるがよろし。右より左に連決は不可なり。

一、全部を救ふか。

二、OをそのままにするとH・H・T・Nは辞職は必せり(Aは疑問なるも即時処分賛成したり)O一人を救ふために五人を失ふこととなる。その時は経の崩壊、余に大学の平和維持の再組織となる。唯一

の道は〇の自発的退却、自信なし。

七月三日 日 雨

雨未だ止まず。各地の被害は莫大なるもの、如し。

清野は「天才の狂気」となりたるもの、其行動詳報に接せざれ共紙上伝ふる所によれば、神護寺其他より盗み出したるもの二百万円以上のものなりと。驚くべく憐むべし。精神變質に基くものならん。

朝、岡部長景子来、計量器問題、東亜同文会之将来計画其他に付語り、意見を徴さる。

午後落成せる劍柔両道の武神鎮座祭に列席す。形勝の地点に一偉觀を添へたり。内田氏苦心の作也。列席者多数、式後挨拶を為し劍道師範〔ゑん〕氏の長谷川流居合あり。学生、先輩多数、劍道柔道試合にて賑なり。

増谷教授之提案に基き七徳堂と命名、育徳園、懷徳館と共に何れも偶然徳字を用ゐることとなり、「大学は徳に入るの門なり」、学府の施設と名としてふさわし。

七月四日 月 曇

午後に至り漸く雨止み風吹き天候回復の期に入る。氣象台の報する所に拠れば、此数日間の降雨総量六百十ミリ(十二石余)にして六十年来の新記録なる由。

大学。育徳園の大池(三四郎池)は増水甚しく周囲岸は浸水し、池中の島は水中に没し、只一本の松が半以上水面に姿を現はしてゐる。

夜、山崎寛次郎、高野岩三郎両博士来。経済学部先輩として各種の問題に付隔意なき意見の交換を為す。経済学部の歴史、人物採用の経緯、教授会の状態、現在諸教授、助教等に対する両氏の觀察など詳細に知るを得たり。問題解決に対しては両氏共案なく、只学府として大学教授として研究に行動に真摯な態度が望ましきことを述べ。大内不起訴の場合は絶対に排斥すべからず、稍時を置きてならば大内も考へるかも知れぬとの觀察なり。高野氏はその思想傾向上山崎氏よりも純理的なり。山崎氏は穩健なる常識的判断を為しつゝ、経済学部の将来の極めて困難なるを痛切に感じ居れり。

七月五日 火 晴

始めての快晴、蘇生の思あり。

東亜研究会学生十数名、林恵海講師に引率せられ来十八日出発、約三十日青島、濟南、北京、張家口等視察の途に上ることとなり、此日一日宮城奉拜、明治神宮、靖国神社參拜の後、総長室に来る。旅中の注意と心得を告ぐ。

○午後一時—四時、大学制度審査会特別委員会。

高等学校問題に関する討議、終了。幹事に於て決定事項を取纏めるところとなる。

○夜、穂積、末弘、神川三氏来邸、十時まで大学問題に付懇談す。意見皆余と一致す。山崎、高野両氏の談話より内容多く、實際適切なもの如し。先般の内務次官及警保局長の交送は本問題とは關係なき

こと分明す。不起訴の場合の対策に就ても略成案を得たり。検事局へ廻るのは本月十五、六日頃ならんとのこと、然れば判決は今月末となるべし。

大内に関しては依然自供せず。他の人々は大内をかばひ居る由なるも山川均の前例のあるも他の人々が全部起訴となる時、其中心人物と目される大内の起訴は矢張り免れざるべしとの見解ある如し。他方帝人事件もあり、右翼の運動によりて此事件が拡大せられたりと見て、起訴を為して公判に於て無罪となる時、司法の權威失墜を心配する向もある由。結局不起訴にはなるまじとの觀察濃厚なり。

七月六日 水 晴

朝、佐々木道雄氏を招致、経済学部問題に関する助教授側の觀察、感想を聞く。

助教授連は一日前途に光明なきを感じ不平、不安。

某二人は旧制度により、助手に任用、助教授より教授に進む約束にて洋行中新制度となり、其後助教授中には教授に適するものなしといふこととなる。

現在は当面の問題に関し矢張り二派に分れてゐる。

最近対立化(教授会)はますます甚しく互に憎悪敵視の觀あり。同僚の会合と思はれぬ。殊に一方之言動は不穩当、将来の希望、学部の繁栄は非常に望み薄しと見^みる。

大学。

阿部重孝氏を柿沼内科に見舞ふ。

一時、教育審議会特別委員会。

整理委員会に於て取纏め中の青年学校令を審議す。林委員長の説明あり。二、三質問ありたるも結局満場一致可決す。

會議後伊東次官に工学部二部教授計画の概要を語る。丹波工学部長更に具體的の説明を為すこととなる。

浜田京大総長、清野事件の責任を感じ辞表を提出す。同情に堪へず。芦溝橋事件以来満一年。

〔聖戦一周年・輝く戦果(東京日日新聞、昭和十三年七月七日)、「近衛首相に賜はりたる勅語」等(東京朝日新聞、日付欠)の新聞切抜添付しあり〕

七月七日 木 晴

大学。

癌研、婦人科に渡辺、病理に太田の二人、新に就職す。

森村氏来、井上氏病氣治療方針に付相談す。

四条隆愛侯肺癌にて入院せるを見舞ふ。

四時再大学、北會議室。綜合試験所委員会。

三菱より三好氏、大学より丹羽、内田、平賀、田中、瀬藤、木村、清水

其他、建築中の試験所を一覽し建築設備の進捗、現況報告、會計報告。

夜、善郎来。

〔東京朝日新聞、昭和十三年七月七日付「事変一周年を迎ふ」と題する新聞切抜添付しあり〕

七月八日 金 晴

大学。病理学教室に至り二十五年前余の解剖したる海軍元帥伊東祐亨伯の心腎等の標本を検査す。同伯の伝記編纂会より過日解剖に関する記述を依頼せられたるによる。瀬田修平氏を招き、根岸正の人事に就て聴く。

二時、教育審議会特別委員会。

幹事私案と称する国民学校、国民実修学校(マツ)要項とに就て議論統出す。

五時、日本俱樂部、服部報公会評議員会に出席す。

此日新事業として自然科学研究に従事する者に補助費(一人約千円、総計一万五千円)支出を可決す。

七月九日 土 晴

九時、丹羽工學部長同道、文部大臣官邸に於て伊東次官、山川局長(欠)、有光課長、^(欠)会計課長と会見、予て工學部に於て慎重に攻究せる「工部教授を加味せる臨時定員増加案」に就て詳細説明す。文部省側も大に賛意を表し、実現の尽力を約す。

文学部支那語教授一名を支那より招聘することに就ても同意を得たり。両案共本予算に追加することとなる。

七月十日 日 晴

終日在家、揮毫、読書、書齋整、盆栽手入等々。

七月十一日 月 曇

大学。政府の財政緊縮方針は進み、大学の本年度実行予算にまで及び

来る。

会計課長、官繕課長等と之に就て語る。

豊明会理事会。一時、第一相互、東洋軒。

東亜同文会理事会、二―三時。同文書院を大学に昇格するといふ大内院長の案に就て懇談。

夜、始めて啓明会理事会評議会に出席す。大久保、三上、長岡、串田、小山、桜井、田中、松浦、鶴見、伊東、笠森。

多数の補助申請中より九件を選び、更に之に就て此日批判の上四件採用、五件不採用、一件留保となる。会后海上ビル中央亭に於て晚餐を共にし、支那に於ける各種資源、日本の差金、その他に就て経験ある人々より面白き話を聞く。

二十五年前薨去せる元帥伊東祐亨伯の伝記編纂委員会の希望により、当時行ひたる剖検に関する記述を終る。

七月十二日 火 晴

十時半、広尾厚生大臣官邸に於て第一回の傷兵保護院顧問会議開かる。本庄総裁、顧問奈良、野村、結城及び余(徳川公病氣欠)。岡田副総裁以下出席、総裁の挨拶に次で藤原、持永両局長より事業計画及び現在の状態に就て詳細説明あり。木戸厚相、広瀬次官等を交へ午餐を共にす。傷兵院の事業は傷痍軍人の教養教化並に優遇に関するもの(藤原説明)、職業保護及び医療保護(持永)に関するものに大別し着々進行しつつあり。予算(十三年度)

一、教養教化に関する事業

四十万円

一、医療保護 二千九百九十一万円

内訳 新宮費 二二、五〇〇、〇〇〇

医療諸費 六、九〇〇、〇〇〇

事務 一、五一〇、〇〇〇

一、職業保護 三、四九一、〇〇〇

一、優遇其他 七〇〇、〇〇〇

総計約三千四百五十万円なり。

結核療養所 新設二十五所 平均五〇〇人。東京大阪 一、〇〇〇

年度内は一二、五〇〇。

温泉療養所 十所 七五—一五〇人 総収容人二、〇〇〇。

精神療養所 一、一一〇。

戦傷病者 四月末迄 約十萬。

内 結核 胸膜炎一二、〇〇〇・四月、一六、〇〇〇・六月末

精神病者 一一〇 臨置、外に二、〇〇〇、 あり、内三〇〇

は^{Psyd.}に移行せんとす。

両眼盲一三五

一眼盲五六四

評議会(一時半)、寄付金、五件。

之にて特別の事態発生せぬ限り九月まで休会。

高橋教授来、上海、南京に於ける視察を語る。中支将来に付ても二、

三面白き話を聞く。大内氏に対する某方面の視察を報ず。

七月十三日 水 晴

事件の発端。

大学。

山川(建)専門局長来。京大総長後任問題に關し、総長候補公選に就て荒木文相に異見あるを報ず。京大に於て十一日後任選挙が延期となりしはそのためなり。

始め文相は上京中の中村書記官に対し、選挙内容を厳秘にすること、候補となりて直に抱負を記者団に語るを避くることを語りし由なるが、八日に至り(教審会議中に突如伊東次官を呼寄せ)公選の絶体非なるを述べ、浜田は総長として適任、且肅学途上に在るを以て留任すべし、若し飽くまで辞任せんとするならば大臣と直接会見の上によべし、との意見なり。山川氏は同日京都に急行、先づ浜田面会せるに辞意固く、公私の生活に於て特別深い関係のあつた清野にして彼の行動ありしを見て、自分は全然自信を失へり、自己は飽くまで止める、事務代理を置いてよし、自分は評議会にも学部長会議にも出席せず静養中なれば、早く後任を定めて貰ひたしと云ふ(山川氏は浜田氏には大臣の真意を伝へず、只留任を希望し居ることと、公選は六ヶ敷き旨を抽象的に述たる由)。

中村書記官の提案に各学部長同意の結果、

九日、山川は各学部長と面会の上、大臣の総長留任熱望の旨を伝ふ(前述の理由)。

その後山川一個人の觀察として、公選の困難なることを述ぶ。

○前例、沢柳京大総長が多数の教授を職首せる時、公選に依らず荒木(寅三郎)氏の任命を見たることあり。東大にては山川(建次郎)総長以来(大正四、五年?)公選を實行し居れり。

世間に於ける公選反対の理由、

(a)法令に根拠なし(議員、地方自治団体の役人の選挙とは異なる)。

(b)大学総長の選挙はデモクラシー思想なり、候補といふも一人を出し、事實はそれに決す。

山川氏は大学の意見を反影せずして総長を任命すると、帝大は大世帯であり、學術を研究する学者の集団なれば、一般行政官の任命とは大に異なる旨を述べたるにも拘らず、大臣は選挙を不可という(命令的)。故に適當なる代案なき限り当分選挙はせぬ、ということとなり帰京せしといふ。

之は極めて重大なる問題なり。余は東大の選挙法は殆ど理想に近きものなるも、各帝大夫々異なる。先づ各帝大に総長候補選定内規を文部省に取り寄せ、再考する。而して内地各帝大総長が文相に面会して懇談を遂ぐるが可ならんと述ぶ。

山川氏も此考を有ち居たる由(次官以下にては駄目)。

(欄外) 西田幾太郎博士の選挙観(京大はあまり窮屈、人材を広く求むべし)、六十才、学内、現役、等々。

一時半—三時半教育審議会出席。

四時、寛永寺に於る興中公司取締役平山敬三(金蔵氏婿)の告別式に赴き帰宅。一昨夜死去せる鳩山春子女史(七十八才)弔問之為め、鳩山邸に赴き一郎秀夫両氏夫妻其他に弔意を述べ。

此日緒方教授来、五十年史前巻に掲載すべき山極先生伝の執筆到底出来ぬから頼むとのことなり。一年余も経過して之では困ると思つたが、

止を得ず余自ら執筆するより外なし。之を諾す。

七月十四日 木 晴

病理教室に赴き五十年史編纂に関する打合を為す。

地震研究所長石本博士第二回交換教授として伊大利に赴き居たるが、数日前帰朝、此日来訪、彼地の地震研究の振はぬこと、独伊両国の比較観察などを聞く。

森茂樹、今裕来。

宮繕課長を招き、非常時局なれば木造建築でもなるべく廃棄の手続を採らず、何等かの作業に当分の内利用することを勧む。清水課長も同感なり。

瀧研、井上子来る。

七月十五日 金 晴

大学、内村教授と脳研究に就て語る。浜口雄幸氏の脳も特長あり、言語中枢特によく發育す。側頭葉、殊に左側の發達良好なり。参考書を貸与す。

舞出、上野来。前回の同様のことを繰返し、二十九日教授会の経過を語る。河合、本位田の言と少し矛盾する所あり、綱紀問題は何故に一人に限るかと問ひしに、それは犠牲を出来る丈少くするためなりといふ。最後のために相当材料を用意しありといふ。

一時半、文部省大会議室。

教育審議会総会。特別委員会にて決定せる青年学校要項を議す。田所

特別委員長、長き説明を為し種々質問あり。田所、林、伊東等より答弁あり。原案可決となる。

政府は皇紀二千六百年に開催の予定なりしオリンピックをIOCに返上し、万国博覧会を延期することを決し、夫々木戸厚相、池田蔵相より談話の形式にて声明する。

〔「風塵録」と題する新聞切抜添付しあり。〕

七月十六日 土 晴

大学。用談来室者、各課長、石原医学部長、瀬田助教授、国司中佐(配属将校、近衛師団へ転任)。

林恵海講師及学生総代、北支へ亜細亜研究会視察学生団明日出発、十五名。

穂積、桑田両氏来。

七月十七日 日 晴

午後四時、東京駅発御殿場經由山中別荘に赴く。玉子、八重子同道、宇田川^子は先発。

時局のため別荘の開きたるもの未だ十に満たず。汽車もシーズンなるに拘らず至つて閑散なりき。午前中に送り出したる荷物トラック、此夜終に到着せず。

七月十八日 月 晴

終日荒れ果てたる庭園の手入れに、人夫一人を相手として労働す。玉

子は家の掃除に大重なり。

先般連日の豪雨は湖畔の形貌を一変したり。増水三、四尺に及ぶべく、あわや棧橋は水中に影を没し去れり。

郭公、鶯を始め、さまざまの鳥声、寂寥の林間を透して四方より聞こゆ。野村、高村来る。いろいろと手伝ひを為す。

七月十九日 火

七月二十日 水

天気好し。日中は可なり暑きも朝夕は流石に淋しく、滞在二日にして心身共に元気を回復せるを覚ゆ。

□□原上の地所は昔時「御茶屋の段」と称へられし地点たること、戸籍簿にて判明す。今後茶屋の段と呼ぶこととす。恐らく旧鎌倉街道に沿ふ景色よき所なれば、旅人は此辺にて茶亭に休憩、風光を賞したるものならん。

四囲の境界には「バラ」線を張廻らし、門も二ヶ所に出来し、四阿(あづまや)、水槽、腰掛等も適所に設けられ、本年始めて開墾せる畑地は六、七百坪に及ぶべし。玉蜀黍、馬鈴薯、あづきの外、種々の種物を試殖せるが、地味疲せ居るため成績芳しからざるも、赤大根、葱、二十日大根等は相当の出来なり。明年は充分に積肥を施せば、作物はよく出来ること略見当付きたり。

七月二十一日 木 晴

竹腰学生主事、八ヶ岳の大学勤労奉仕よりの帰途立寄る。ロッヂにて

午餐を共にし、学生之勤勞振りを聞く。

午後五時三十九分の列車にて、御殿場より帰京す。

各地に転戦し、空の英雄として馳名高き南郷大尉は、南昌の攻撃に際して戦死す。軍神として祭らるべし。大尉は旧知の南郷次郎君の長男にして、学習院出身、海軍航空隊の至宝なりし人、誠に惜むべし。

七月二十二日 金 晴

朝、宮川伝研所長来邸、八月四日より一ヶ月半の予定にて満州、北支及び中支に於ける同仁会の活動を視察する由、その目的、計画、宇垣外相との会談の模様などを語る。

京都帝大法文学部長宮本英修、文学部長小島祐馬、書記官中村恒三郎の三氏来邸、文部省の総長候補選挙不許可問題に就て懇談す。

大学。

食後田中、石原、丹羽、舞出四学部長を総長室に招き、右の問題の経緯を語り、考慮し置くやう依頼す。

癌研。

七月二十三日 土 晴

十時、佐藤、桑田、寺沢三学部長及江口書記官と総長室に於て総長選挙問題其他に付き協議す。昨日の四学部長との会見よりは具体的意見出づ。京都総長の健康状態如何によりては、此問題を早く解決するの要あり。各帝大総長が文相と会見するよりも、余一人にて懇談する方、可なりとの意見に一致を見たり。月曜江口氏、専門局長と打合せ、

大臣との会見を来週中にすること決す。

北海道演習林内より産する石綿を適當なる事業家に払下ぐること就て、農学部長と演習林長と遺漏なき公正なる方法を講ずることとす。

宮繕課長来。柳金太郎赴任挨拶(関東庁保健館長)。

午後四時、弘同伴東京駅発車、品川より堀内外務次官及南氏同道して山中に赴く。

七月二十四日 日 晴、時に雨

朝、文彦、昭彦を伴ひて来る。

七月二十五日 月 晴、夕雨

昨夜来涼し。

十時、一家打揃つて「茶屋の段」に赴き、野菜類を採取し、雑草を除くなど約一時間清遊、よき運動なり。

午後、田中耕太郎、舞出長五郎二氏相携へて来る。忍野方面をドライブす。五時、御殿場に返る。

竹腰、小原、森田等も来る。

夕刻、江口氏より電報来。

浜田総長今朝八時半終に逝去の旨、遺族より電報にて知せ来る。葬儀は二十九日の予定。文相と会見の日取りは追つて山川氏より知らず等々。昨年四月京大総長に任せられてより交渉頻繁となり、有為にして勇氣ある良き総長として、相談相手として力となる人なりしが、肅学途上清野事件にて宿痾の腎臓炎悪化し、尿毒症にて終に倒れたるなり。惜

しき人なり。事情複雑、洵に同情に堪へず。直に弔電を發し、明日帰京に決す。

浜田青陵総長死す。

七月二十六日 火

晴雨交々至るは昨今山中の特徴なり。

雨間を見て□□の手入、漕艇、散策などを試み、雨降れば読書と原稿執筆、児孫等と□戯す。此日五十年史上巻山極先生伝を草し了る。

健夫来る。四時半文彦、昭彦同道、内海自動車にて御殿場より乗車、帰京す。

夜九時山川専門局長来。

昨夜荒木文相と単独会見、廿八日各帝大総長と公式会見決定。総長選挙問題に関する大臣及省内の意向、之に対する山川氏の理解ある所説等を聞く。

七月二十七日 水 晴

大学。

癌研。阿部重孝氏を見舞ふ。

皇軍、九江を占領す。漢口の陥落は案外早かるべし。

夜七時半、幡谷荒木文相を私邸に訪い、約一時間大学教育、學術振興、総長選挙問題より時局、支那の将来其他に就て隔意なく懇談す。明日各帝大総長との懇談会に對する方針の内相談を受く。大学の事情を詳述し、文相が飽くまで選挙を否とするならば事は重大なるを以て、其

結果は如何に發展すや不明。明日開くことに決せる以上は、止むを得ずば代案を如何にすべきやと諮るならば考ふべしといふ。

七月二十八日 木 晴

十時、帝国学士院に於ける懇談会。

大学側、東京(余)、京都(平野正雄総長事務取扱)、東北(本田)、九州(荒川)、北海道(今)、大阪(楠本)。

文部省側、荒木文相、内ヶ崎政務次官、伊東次官、山川局長、

堀池秘書官、有光課長其他。

文相、先づ浜田総長の逝去に對して弔意を表し、各帝大の活動、時局下に於ての種々の奉仕等に對して謝意を述べ、帝大学生が風紀問題に問はるるもの殆ん^{マツ}なかりしを悦ぶなどの前置を為し、

一、大学の真相、活動を世間に紹介すること。大学の發展のためには尽力すること(研究の挙がるやう)。大学側からの希望を隔意なく述べられたきこと。

二、帝大の職員、学生をして社会の信頼的ならしめたきこと。品位、風格、世の期待に添ひ、各大学の模範となるやうにありたきこと。学生の監督に警察官が出過くことは不可、大学自身綱紀取締られたきこと。

三、浜田総長の死が動機となつて予ての考へであつた大学の明朗化、大学令第一条の徹底したし。時々種々の問題發生して^{マツ}ることは大学の明朗を欠くことは遺憾なり。

大臣として補弼の任を全ふする為には、各大学の総長始め職員が選

挙によつて決定し、それを取次丈では困る。殊に任期まで定めることは面白からず。之等の内規によつて大学の人事が取行はれ、大臣は取次ぐだけでは責任を以て奏上しかねる。何か之に代る案を得べく懇談を遂げたし。文部省としては、充分に大学の意見を反影することにつとむるは勿論なり、云々。

之に対し余は、世間の大学に対する認識の不足、二、三の教授が問題を起すと其学部全部、惹いては当該大学全部が不都合であるかの如く批判せらるること、帝大が文理大などと相競つて居るなどの声を聞くが、苟も帝大は世界の学会を相手、対照として居る研究を挙げつゝあり。研究費、施設、人員の充実を見れば更に活動し得ること。

選挙問題に対する大臣の意見は分かつたが、大学には伝統あり(種々研究の結果現在の制度が出来た)、種々の機関あり、制規の変更は少くも評議会の議を経るの必要あること(また之は教授会にも聞き諮ることとなり)、総長の考へのみにて決する問題ではない。此問題はやりやうによつては大事に紛糾すること等を述べ、総長の間にて充分研究懇談の上、文部省と意見の交換をなすこと、したき旨を述べ、急には解決出来ない。

各総長よりも種々意見を述べたり。

山川氏より書記官、事務官の増員(各学部一名宛)配置の話出で、大坂、仙台等には書記官なく、事務官も少く、東京も事務官は各学部一名宛必要なこと。

之は学部長が俗務に妨げられ、研究も出来ぬ状態に在るを救ふ点に於て、極めて必要なることは各総長一致の希望にして、大臣、次官も是非

左様取計ふべしといふ。

〔欄外〕 荒木文相の爆弾、要望

総長懇談。京大総長への注意

午餐を共にして散会後総長は居残り、江口書記官の来同を求め、先づ総長候補選定に關しは略次のやうに纏まる。

総長候補推薦仮案(内規改正)

一、全学教授の総選挙は再考の余地あり(東大としては、◎評議会、制度審査会の意見を徴するを要す)。

一、評議会に於てせず、協議員会を設けること。

一、協議員は評議員の外、更に一名又は数名(各学部)の教授を加へて最(事の重大性に鑑み)適任者を詮考する。

(一)、方法としては学部長が協議員を推薦す)

一、協議会は三名の総長候補者を協議選定す。

一、総長は右の候補者(順位を附せず)を文部大臣に推薦、大臣と協議す(一名とするか三名とするか)。

○本問題のみならず帝大の重大問題には、時々寄合い結束して事に当る。

場合によりては重大なる決意をしなければならぬこととなる。

○教授の任命は総長問題より更に困難、殊に大学に最も大切な要素たる教授の任用には、其専門の人々が最もよく分つてゐる。現在の詮考方法は殆ど理想に近し。之を改むることは殆んど不可能。併し各大学に於て種々苦き経験を嘗めて居ることもあり、(九大の助教授の投

票件、北大評議員の一年交代等)は此際出来得るならば、各帝大の共通の方針が樹てば改善し易し。各内規を江口に送り研究、相互理解。此日新聞に発表せる文案未段左の如し。

尚文相は大学職員の内用奏請、補職に付き、従来法令に根拠なくして行はれ来つた選挙は、妥当ならざるを以て、之等の改善を要望した。文部省並に各大学は此主旨に基き夫々具体案に付研究、懇談を遂ぐることを申し合せて散会した。

夜九時四十分東京駅発(鎌田随行)京都に向ふ。荒木寅三郎、内ヶ崎楠本、今諸氏同車なり。

七月二十九日 金曜(マツ) 晴

内ヶ崎氏と京都日々記者を交へての談話中、内ヶ崎氏の言、戦後思想戦の対立、思想の悪化は充分に予想せられる。各方面に於て之が問題となる。学府に於てもそういふことが懸念せらる。選挙にそれが反映し、それが対立の基となる惧あり(荒木、文部両三氏の考)。

「之は然らず、却つて一致すといふ見方もあらん。」

国家総動員が着々実行せられ、非常な時局なるに拘らず、世間のある方面、大学にも無関心の態度あることに對する不満あり。平時の気分で居ることは此際面白からず。殊に国務大臣として日々戦局の推移、現在の国勢、将来の問題等を議してゐる文相には以上の感が強い。

昨夕刊。

新聞記事は大学自治の破滅といふやうに報導せるもの多し。之の誤解を解く必要あり。東京駅にて日々記者、車中にて京都日出の記者に余

の考の一端を漏し置けり。

○総長推選は総選挙が理想案なりとする意見は学内にも相当強かるべし。余は之にも弊害を伴い得ると考へるも、之が最善にして之を改むべきに非ずとすることが評議会、制度審査会の大勢とならば余は直ちに輿論に随ふべし。

現在のやり方に於て少くとも改むべきは、①秘密の守られざること。

②候補一人を決定し未だ任命もなきに、全学教授の前に於て挨拶し、記者と会見すること。③一人の候補を文相に申達すれば、事実に於て文相は只取次ぎの役をする丈であつて、監督長官の面目はなし(荒木の強調する所)。④教授の任用に、学部長の推薦に面白からぬ事実ありと聞く(経、派閥)。種々の運動(派閥的關係運動)。

弔辞

青陵浜田耕作博士夙に職を京都帝国大学に奉じ、考古学の講座を担任し、諄々として後進子弟を指導せらるること二十有九年、其の深淵なる学識を以て帝国学士院会員に挙げられ、実に一代の碩学斯界の權威たり。昨春衆望を負ふて京都帝国大学総長に任ぜらるるや、其の高潔なる人格と英邁なる識見とを以て事に当たりて熟慮断行し、治績着々として挙げ、内外の期待頗る大なるものありしに、不幸二豎の犯すとこととなり溘焉として長逝せらる。誠に哀悼痛恨の至りに堪へず。

茲に東京帝国大学を代表し謹みて深厚なる弔意を表す。

昭和十三年七月二十九日

東京帝国大学総長長与又郎

(東京帝国大学官制第一条(一部省略)、第二条の印刷物折り込みあり)

大学にも反省すべき点あり。

○大学自治を守る為には、大学自身反省すべき点もある。

○新しい講座が出来ても、教授を任用することも出来ぬやうな所あり(如何にすべきか、其解決は、総長、学部長、該学部評議員が相談すれば決する。又は内規を改正せねばならぬ)。

○某大学では協議員が総長候補三名を連記で出す時、全部自分の学部の教授の名を挙げた例尠からず(公平に非ず)。

○大学全体としての内規を、各学部の内規により破つて居る。

学部長(三年)を一年毎として選挙すること本部は全然知らず。

評議員三年(之は帝国大学令で定まつて居る)を一年で交代して

いる。九大、北大。

内規(大正七年制定)、或学部に於ける内規によつて無視されて居ることとは改めなければならない。

○勿論大学全体の内規と、各学部の内規とは別問題ではあるが、同一の問題に就て両者が別々になつて居ることは不可。此際制度調査会にて訂正し合理化したし。

○総長任期は総選挙が廃止せらるれば自然消滅となるも、内部の申合せにて凡そ定めて置くことが問題となる。無暗に長く其任に止まる場合には弊害が起り得ると同時に、教授に定年制を実施せるに對しても内部では凡そ任期を定むる方宜し。

(欄外)内規では総長任期説は¹⁶/₂₃で通過し、五年は¹⁷/₂₃で決定、再選も妨げず、の名文なし(学部長にはあり)。五年で断然止めるのが

当然。

○任期を廢した時の利益は、総長が不信任、又は自己の理由に依り辞職する方が大学のために得策であると考へた時、随時適任者と更はることが出来る。

○学部長の推薦は教授の互選に依る外に方法なし。総長が予め学部の有力者と話し合ふことはあり得ても、大体学部の自治は学部に一任してある。総長はなるべく容喙せぬ方がよい。併し重大な問題では相談を受けて居る。人事には直接関係しない方がよい。総長が意見を徴された時は別だが、命令的にやることは不可。

○教授の詮考は殊に総長が口を利くことは不可能である。専門を異にする人の適否は同一学部の教授間の間に於ても判明せぬことあり、結局現行の先任者、又は近接専門学者及び公平長老よりなる詮衡委員の間で熟議をこらし、之を教授会に函つて候補者を定め、学部長より総長に具申するのが最も良い(医学部の詮考規定の如き)。

但し此場合絶対公平なるを要す。

○現状を当局に説明するため、又各学部間に於ける相互に事情悉知のため、教授詮考規定を各学部(他大学も)一通り検討し、互に参考とすることが必要(之は各帝大総長と約した)。

○大学の自治は各学部の自治の集成であり、一学部の自治が円満を欠く時、大学全部の問題となる。学部の自治を守るには教授の人格に重きを置いて詮考することが大切である。

○文部省に内務系の人々=伊東の思想傾向、精神文化研究所、山本、井上、菅原秘書官、蓑田胸喜等、

正直な大臣を誤つた。

○大学に関すること、教授会其他が世間に漏れることは今後嚴重に戒めなければならぬ(経の革新派遣には特に言つて置く)。

○文相は二十七日の夜には総長選挙のこと丈を余に諮り、言は教授に及ばず。然るに二十八日には総長、教授一切の補職(学部長、所長等)として一切の選挙を否とする態度に出たるは不可解なり。伊東の指し金ならん。余は事茲に至つては到底駄目と早く見切りを附けた。

京都帝大の私案(評議会案)(懇談会席上では内容は云わず)後に総長懇談の時に述べたこと。

総選挙を行はず有力な協議員会を組織し、其所で候補三名を選び第一候補を文部省に推薦する。

第一、第二、第三と順序を附せず上申し、内容は総長が文部大臣と協議して定める。

京都帝大は浜田氏後任と急ぎ居るため、取急ぎ右の案を持つて東京にきた。余は之は直に前例になるから、平野氏は迷惑だらうが当分事務取扱で止まり、秋になつて各大学の意見の纏つた場合、其方法に據つて後任を定められたしといふ。平野氏諒承す。

此問題は大学の極めて重大なる問題なるが故に、慎重に各大学は少くも評議会に諮り、その上で東京に会合して帝大側の意見を定めて文部省と懇談することとする。それも十月以後となるべし。

○自然科学者許り、特に注意。

○評議会も招集するや否や(時、他大学は秋)

二十八日夜九時四十分東京発、二十九日朝八時半京都市、京都ホテル

に入る。昨日来耽読の、

ローベルト・コッホの生涯(大科学者の歩める道ウンゲル著、宮島訳)を午前中読了す。頗る感興を受く。

十二時半京都帝大本部に赴く。

浜田総長学葬式に列す。弔辞を朗読す。来弔者二千余名、神式の莊嚴なる儀式なりき。式場正面には和服姿の故人の写真を掲げ、挙式に先ち衆人起立の裡に、遺骨を□つた小さな箱が喪主によりて運ばれ壇上に安置された。浜田ももう灰になつたか。此瞬間が最も自分の心を打つた。考へれば考へる程気の毒であり惜いことをしたと思ふ。

三時楠本氏と共にホテルに帰る。清野夫人より電話あり、安否を聞く。弁護人守屋孝蔵氏来り精神鑑定に付相談す。

四時ホテル発、楠本博士の自働車で京坂国道を疾走す。京大より阪大まで丁度36哩なりと運転手はいふ。立派なアスファルト道なり。京都側は並木に銀杏樹を殖へ、大阪に近くはポプラとなる。木津、宇治、保津の三川合流して淀川となるは橋本の宿のあたりなり。男山八幡、山崎などを左右に眺めつゝ、始めての道路なれば物珍らしく、よきドライブなりき。大阪帝大病院に赴き、今村博士を加へて「伊勢屋」に晚餐をとる。佐多氏も中途より来る。「いせや」は久し振なり。矢張大阪第一の料理屋なり。

九時三十分大阪駅より乗車、帰路に就く。

七月三十日 土 晴

八時東京駅着、一度帰宅。汗ばんだ下衣を更へ、入浴の後、直に大学

に赴く。

十時半、田中、丹羽、桑田、寺沢、安藤、舞出(石原氏は遅る)六学部長を招致、江口氏を加へて、去る二十九日文部省側との懇談の経緯を詳述し、新聞にさまざまの誤報あるを訂す。来一日評議會を開き同様に実情を語り、考慮し置くやう依頼することに決す。

午食後、小野塚氏と総長室に於て語る。

二時―四時、癌研。

〔昭和十三年七月三十日附「大学と自治」「人の欠乏」と題する東京日日新聞社説切抜、同日附「大学改革の促進」と題する東京朝日新聞の切抜貼付しあり。〕

〔国史 南服恕一、法法 川井一男、法 宇都宮信綱、法 小田村寅二郎、文支哲 近藤正人、法 今井善四郎、国文三 夜久正雄、政 高木尚一〕と記されたメモあり。〕

山本勝市

精神文化研究所 和歌山、荒木と同郷、京大経卒

井上孚麿

憲法

菅原秘書官

養田胸喜

其他外部にあつて煽動せるものあり。

七月三十一日 日 晴

八時半出発、検見川に赴き勤勞奉仕最終日の記念運動会に望み、学生(マ)にその勞を謝す。末広、東、佐々木氏も来川す。正午同所を去り末弘

佐々木両氏と東京会館ブルニエにて午餐を喫し、後神宮プールの関東中等学校競泳を一見、夕刻帰宅す。

夜、江口氏を招き、明日評議會終了後に記者団に発表する総長談の原案を練る。江口氏は九時辞去す。

此日午前、伊東次官は江口氏を招き大学内の空気を打診、いろいろ懇談を遂げし由。

各新聞の論調は悉く文相の暴挙攻撃非難の声高し。

文相は一時大学が選挙を止めねば大学教授全部を誅首しても決行するといきまきたるも、昨今は態度稍緩和せる様子なり。文相を誤りたる責任者は伊東ならん。

(てるぬま やすたか 文部省)

(なかの みのる 東京大学史料室)